

ちょっと ブレイク しませんか？

第 23 回

アンジェラの灰 【1999年 米英】



イソップ寓話集に「呑んでくれと女房」と題する小話がある。

呑んでくれの亭主を持つ女がいた。女はその病気を止めさせたい一心で、こんな細工を思いついた。亭主が酔って正体もなく眠りこけ、死人のように何も感じないのを見すまして、肩に担いで共同墓地まで運び行き、置き捨てにして帰って来たのだ。亭主が酔いから覚めた頃を見計らって、墓地に出かけて戸を叩くと、亭主の声で「戸を叩くのは誰だ」と言う。女房が「わしは死人に食物を運んで来た者じゃ」と答えると、「おい、おっさん、食うものは要らぬから飲むものを持って来い。飲め、ではなく食えだなんて、殺生だ」と亭主。女は胸を叩いて言うには、「やれ、情けない。折角の思いつきも水の泡だ。あんたという人は、ちっとも賢くならないばかりか、前よりひどくなった。あんたの病気は慣性(ならいせい)となってしまった」

世界的大恐慌の1930年代。ニューヨークで出会って結婚したマラキ（ロバート・カーライル）とアンジェラは5人の子供をもうけていたが、生活が貧しく、生まれたばかりの娘マーガレットの死を機に、一家で故郷アイルランドのリムリックへ戻る。小さな部屋を借りた彼らの生活は、仕事もないのにプライドだけは高い酒飲みのマラキのせいで一向に楽にならない。アンジェラだけが子供を守るために奔走する。そんな母の姿を見守り続ける長男フランクは力強く成長。学校では作文の才能を認められたりもした。やがて父マラキは英国へ単独出稼ぎに出掛ける。しかし何の連絡も金も届かない。フランクは石炭運びの仕事が始めるが、結膜炎になり断念。そしてXmas。帰国した父は、無一文のままだった。再び出ていった彼はそのまま蒸発。ついにアパートから追い出された一家はいとこの家に厄介に。フランクは学校をやめ、家を出て、電報配達人として働き始める。いつしか、彼の心に米国への夢が芽生え始める。一生懸命金を貯めたフランクは、ついに米国行きの船に乗り込むのだった。

「飲酒とDVさえなければ良い亭主なのに」と涙ながらに訴える奥さんに出会ったことも何度かある。職場のメンタルヘルスで注目された3A（欠勤症(アブセンティーズム)、事故(アクシデント)、酒精(アルコール))の一つアルコール依存症は増大する一方だ。「酒は百薬の長」とも言うが、大量飲酒は駄目だ。飲酒以外にも、分かっちゃ要るけど止められないのは、煙草、賭博、インターネット、過食、等々、いずれも強迫的行動という見方もある。悪い行いを長く続けてはいけなことを教えた作品だが、イソップ寓話から紀元前から人間の慣性はあまり進歩していないことを学ぶことも出来る。



映画評論家・精神科医

かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平

岡田クリニック院長
名古屋工業大学 名誉教授